



*miho Hatanaka,*

前回、看護学生による死をテーマにした詩「死とは」を載せた。社会人経験のある者が含まれるものの、多くは高校を卒業する時点でかなり限定的に将来の進路を選択した学生たちは、そうではない同学年者よりも人の健康や命に対する関心も高いと思われる。今回は、前回「死とは」を書いた同じ学生による「いのち」と題した詩を。



【第22話 いのちのうた 7 : 大人のコトバ】

自分の将来の仕事が身心のケアを必要とする人を対象とすることは想定内の看護学生は、命についてどのように考えるだろうか。ふとそのように思い、私が心理学の講義を受け持つ学生にも「いのち」の定義を尋ねてみようと思った。余命の限られた患者の心理について学ぶワークをした中で、小・中学校等で性教育を行う際に子どもたちに尋ねるように、「“いのち”とは何だと思いますか？ あなたの考えや思い浮かべることなどを書いてください」と問いかけ、レポートしてもらった。

これまでに多くの「いのち」についての言葉に触れてきて、小学生のように「すなお」とも、中学生のように「ぶっ飛んで」も、高校生のように「理屈っぽく」もなく、何と表現したらよいのか、「無難な」印象を持った。それぞれへの印象をこのようにくるっとまとめてしまうことはもちろん良くないことで、言葉を書いたひとりひとりに申し訳ないことは承知している。ただいずれの印象も“あえて言えば”ということに過ぎないものの、やはりその年代々々の子どものライフステージ的な色が感じられるのも確かだ。看護学生の詩について「無難な」と感じたのは、大人になり切った者の「割り切り」も、かと言って幼い子どものような「ファンタジー」もない代わりに、冷静に命をみつめる良識をも感じるのだ。どの年齢の子どもたちのいずれの詩にも、鋭い“真実”を見出すことができる。そのような意味でこの詩もまた、味わい深い真実の言葉が集まっている。

いのち とは

作：M 看護学校のみなさん

自分が産まれ、今まで生きてきた証

私たちがここにいる意味となるもの

命とは 次の世代のバトンだと思う

小さくて儂いようで重い、全て平等な価値があるもの

この世に1つしか存在していなくて、とても傷つきやすいもの

自分が生きていること象徴してくれるもの

自分だけのものじゃないもの

魂とはまた違う、終わりがあるもの

いつなくなるのかわからないもの

いのちとは、

みんなが当たり前持っているもの

自分や他の人に影響を与えて成長させるもの

成長するための鍵

生きる動力。源。

人間の機能が止まらないための装置

命とは限りあるもの。

生まれてから人は誰しも死ぬが、その間の期間は人それぞれ過ごし方が全く違う。

望まれてこの世に産み落とされたもの。

誰しものがなにかの使命を持って生まれて来るものだと思う。

いのちは、

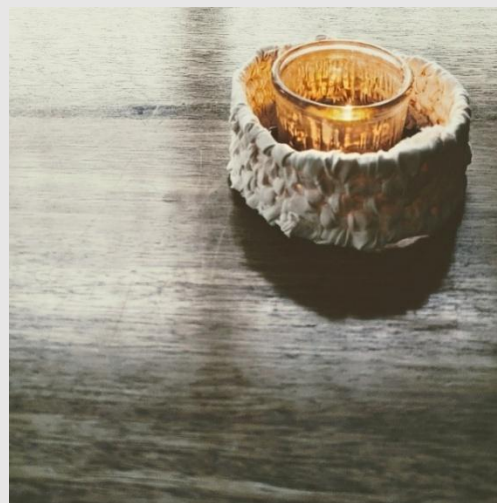
ろうそくの火

生きている間灯っている光

捨ててはならないもの。自然となくなるのを待つもの。

人が生きてるって感じられること

食べて 寝て 人と触れ合って 幸せを感じること。



*Light*